長泉町わくわく塾・伊豆八十八霊場巡礼報告書

報告者　奈良橋慶行
後藤　隆徳

年月日　　平日＝２０１１年１０月１３日（木・晴）　参加者＝２２名
休日＝２０１１年１０月２３日（日・曇時々小雨）　参加者＝１４名

回　数　　２０１０期・第１８回、２０１１期・第６回

巡礼寺・順　●二十一番札所　龍沢寺　（りゅうたくじ）

＊ 本尊・子安観世音菩薩　＊ 山号・円通山　＊ 宗派・臨済宗・（妙心寺・末寺）　＊ 草創・不明・（1761（宝暦十一年）開山）

＊ 豆州志稿によると、「この寺その昔愛宕山下にありて、僧空海（後の弘法大師）開創す、とあり。
1596-1615（慶長年間）僧天外の時、臨済宗に改宗、1760（宝暦十年）名僧白隠が来往して翌年開山し、妙心寺派となる。
寺には、伊豆の長八として有名な入江長八（伊豆松崎出身）の鏝細工画が数多くあります。
星定の像、臼に鶏、五条橋の弁慶、群鳩、天孫降臨図、等ですが一般の方は見ることが出来ません。
唯一写真の、不動堂の龍、は外にある為、見る事が出来ます。

●二十二番札所　宗福寺　（そうふくじ）

＊ 本尊・阿弥陀如来　＊ 山号・泉龍山　＊ 宗派・曹洞宗（法華寺・末寺）　＊ 草創・1673（延宝元年）

＊1590（天正１８年）豊臣秀吉の小田原征伐の時に、出城の山中城（ここから８㌔ほど箱根に登った所に史跡があります）攻略の戦の、戦死者追福のため、法華寺三世、橘庵明州が創立した。

●二十三番札所　東光寺　（とうこうじ）

＊ 本尊・延命地蔵菩薩　＊ 山号・日金山　＊ 宗派・真言宗　＊ 草創・不明

＊ 草創は定かでなく、堂の裏手に墓のある、松葉仙人の開創ではないかと、云われてる。
これが正しければ、271（応神天皇時代）に、相模

の国に飛来した円鏡（伊豆山権現）を松葉仙人が奉祀したのが始まりであるという。

＊ 本尊の地蔵尊は　1685（貞享中）源頼朝が鎌倉幕府開いた後に、奉納して信仰したと言われる。
また本尊の脇仏の嘗善・嘗悪の二童子像は 1671（寛文十一年）奉納されたもの。

＊ 三仙人の墓・当寺を開創したと伝えられる、松葉仙人と共に木正仙人・金地仙人の三仙人の墓が本堂の裏にあります。
東光寺の特徴は、多数の石像です、千有余、熱海、湯河原からの石仏ハイキング・コースの途中にある石仏まで、数えると、二千体以上？はあります。

距　離　　４Ｋｍ＋６Ｋｍ＋約１３Ｋｍ（上りが厳しい）＝約２３Ｋｍ

タイム　　下土狩５：３０―北高前発５：４５―龍澤寺６：１０～６：４０―宗福寺８：００～８：１５―松雲院８：５０～９：００―山中城址９：５０～１０：５０（昼食・休憩）―函南原生林１１：２０―十国峠レストハウス１３：３０～１３：４５―東光寺入口１４：２０（平日巡礼）

温　泉　　平日・休日＝函南町・湯ートピア函南温泉（７００－）

寺経費　　なし

参考資料　　「伊豆霊場振興会」ＨＰ

平日は北高前、休日は龍澤寺から出発。休日時は、早朝で龍澤寺はまだ朝の修行中で「静かに」と注意を受ける。

外でお勤めを済まし、納経帳が手間取っている間、白隠弾師の書画や入江長八の鏝細工画等拝見することは出来ないが、唯一外にある為不動の龍を見ることが出来た。

休日は、境内に入ることが心配されたが問題はなかった。左手の釜場に行くと若い僧侶が湯を沸かしていた。聞けば、これから５日に一度の剃髪をするとのこと。朝の慌ただしい時間帯で、別棟では昨夜宿泊したであろう人達が布団を上げていた。中に外人さんが２名。正すと、現在は年に数回一般の修行を受け入れ、坐禅が中心で期間は一週間とのことだった。

龍澤寺を出発。富士見台や加茂団地を通り抜ける際には、通勤時間の為かスピードを出す車が恐かった。平日時は、少し道を間違った。

龍澤寺

城のような石垣

富士見台から小中学生の通学路となっている、急な階段を上りつめると山田中学校の通りに出た。下って分かったが、ここには裏道があり、次回の休日班はここを使って早く下った。

山田川に降りて九十九橋を渡ると、頭上には駿河湾環状線の大きな陸橋がありこれを潜る。この先に「三島七石・鬼石」があった。平日班は、山田川の市民農園で休憩。ここから箱根旧道に出るまでは急な坂道、途中養豚場でもあるのだろうか？　朝からこの異臭には参りました。

宗福寺着。小さなお寺だった。ここでは本堂の中でお勤めをする。お寺の奥さんが御朱印を押している間、小さな男の子がそばから離れようとしない。ここには集落の村おこしだろうか「軒下の美術館」があって、正に軒下にその地域の特徴的な写真を何枚か掲げてあった。

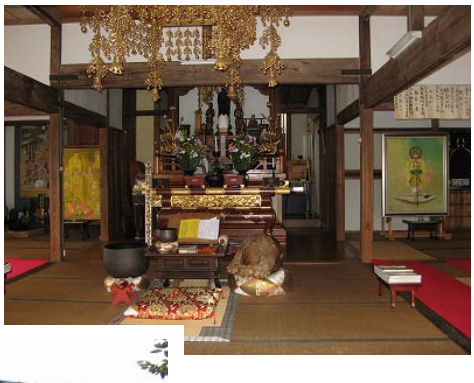
ご本尊の阿弥陀如来三尊像は、平成２２年に修復され金ピカに輝いていた。感じのよい若奥さんに聞いてみたら、金箔を貼ってあるとのことで、相当のお金は掛かったようです。

宗福寺を出ると、いよいよ箱根旧街道に入る。“臼転坂、題目坂、大時雨坂、小時雨坂”を登りきると坂小、坂幼稚園があり元気な声が聞こえる。　その先の松雲寺に立ち寄り休憩をする。

寺の裏にある大きな“なぎの木”椰の木は風除けのために植えられているが、

宗福寺

ご本尊



江戸後期のお地蔵様

風がやんで静まる意味の、凪に通じると言うお話です。外回りの水は２～３㌔離れた、お寺の山から引いて使われているそうだ

松雲寺は尾張家、紀伊家など大名の参勤交代の寺本陣になっていた、歴史的な話など快く話してくれた。感謝。ここは日蓮宗のお寺。伊豆八十八には日蓮宗は河津に一ヶ寺のみ。みんな、こんな温かいお寺なら有難いと思った。

休憩を終え、待っていたのは下長坂“こわめし坂”。キツイ上りが続く。上り詰めた所で国道を横断。“上長坂“でさらに国道を横断し、講師が指した先には、まゆみの木がありタワワに赤い実をつけていた。

杉林の中、曲がりくねった石畳の風景は、いつか本で見た風景と同じ。箱根西麓旧街道を満喫！

山中城址着。平日はここで休憩・昼食。休日は時間が早かったので函南原生林を通過し、更に十国峠レストハウスまで足を伸ばした。ここを巡礼で訪れるのは、これで通算６回目だが今回が一番早い時間だった。

平日は良い天気でノンビリと芝生の上で昼食会だった。終わるころ三島の幼稚園生がワイワイやって来た。

こわめし坂

マユミの木

旧街道石畳

昼食

東光寺をめざして出発する。少し国道を上り、右折して旧道に入り、林道中尾線につなぐ。道端には、野菊やりんどうが咲き、目を楽しませてくれた。２０分ほどで、函南原生林「学習の道」入口より原生林に入る。

ごつごつした石ころで歩きにくい道が続いたあと、檜の枝が落ちてフカフカ柔らかな道となる。その後落葉樹の上をザクザク歩く。この道も足に優しい。

少しの雨は、原生林が傘になってくれた気がする。枯れた沢で休憩を取り、更に進む。原生林の中を上り下りしながら、県道２０号線に向かう。「せっかく上ったのに下がるのはもったいないよ」と後ろから声が聞こえた。（本当だ）

丸太で出来た、高い階段が続き、大変苦しめられた。

（帰りのバスで講師の話の中に、予防としては水分を良くとる事、冷やさない事、前日はしっかり睡眠をとる事、と言ったアドバイスがありました）

函南原生林前バス停に出て、県道２０号線をひたすら歩く。十国峠で休憩したが、ここでバスに乗れると思った人も！ここから東光寺に向かう。

十国峠レストラン

十国の意味

県道の岐路に、松虫草や河原ナデシコ、吾亦紅（われもこう）、釣鐘人参等が咲き、眺めてほっとしているのも束の間、東光寺入口までのダラダラ続く上り坂は、本日最後の試練となった。日金山着。ここからバスに乗り、函南「湯ートピア」温泉へ向かった。

休日は標高約５０ｍの北高前から、標高７５５ｍの東光寺入口まで、標高差は実に７０５ｍ。距離は万歩計で２２Ｋｍだった。

伊豆巡礼、三大難所の一つと言われる、箱根越え修行の一日も、無事終わりました。ありがとうございました。（合掌）

（注）奈良橋さんの記録は、２００９年１０月２５日、２９日のものです。

箱根旧街道石畳

歴史　江戸時代初期の箱根越えの坂道は、雨が降れば脛まで泥に潜ってしまうような悪路で、ここを通る旅人は大変な苦労をしました。幕府はこうした旅人の便を図るため、街道に箱根竹を敷きましたが根本的な解決には至らず、延宝８（1680）年に金千四百六両余をかけて石敷きの道にしました。これが今日有名な箱根の石畳です。

（三島市教育委員会発行　箱根旧街道石畳　整備事業の概要より）

坂の言われ

臼ころげ坂　牛がこの道で転がったので「牛ころげ坂」とか臼を転がしたためこの名が付いたと言われています。いずれにせよ、かなりの勾配でした。

下長坂（こわめし坂）

急勾配で背に負った年貢米も人の汗や熱気に蒸されて、強飯（こわめし）のようになるからだと言われています。

龍澤寺再建話

今白隠と呼ばれた山本玄峰老師

　龍沢寺専門道場師家、妙心寺第６３２世第１９代の官長般若窟山本玄峰老師は、昭和３６年６月３日、９６才の高齢で遷化された。幾多の荒廃せる寺院を再建し、禅風を高揚し、「白隠禅師の再来」「最後の禅僧」と呼ばれた。

　老師は慶応２年和歌山県湯の峰に生まれる。生後まもなく同村の岡本家に引取られ養育される。１９才の時眼病にかかり、まさに失明せんとして、四国霊場遍路の途中、雪蹊寺の太玄和尚に出会い、仏門に入る。

　大正４年５０才の時三島市の龍沢寺に入り、当時廃寺寸前だった寺を復興させる。昭和３６年、９６歳で遷化されたが三島・沼津を中心に多くの信者を生んだ。老師の名声は全国に広まり、老師の導きを受けに政財界の大物たちが馳せ参じています。

　中でも、太平洋戦争終結にあたって内閣総理大臣鈴木貫太郎に『耐え難きを耐え忍び難きを忍び・・・・・・』と提言したことはあまりにも有名である。

（伊豆霊場振興会　HPより）

平日班

休日班